

百周年を迎えて

1905年(明治38年)創立の愛知淑徳学園は、昨年100周年を迎えました。本学園は昭和36年、高等教育機関への第一歩として愛知淑徳短期大学(家政科)を開学します。さらに昭和39年には国文科、40年には英文科設置と、新たに学科を増設して発展を続けていきます。卒業生に学園での思い出を語っていただくシリーズの第8回は、国文科第1期生の森久仁子さんに登場していただきました。

勉強、国文学会長、同好会の創設…、充実した2年間でした。

池下校舎で高校受験をし、星が丘の新校舎で入学式をした日のことは、今でも鮮やかに思い出します。制服の色も明るいブルーに代わり、楽しい高校生活の始まりでした。

高3の12月、父の知り合いの商社の方から声がかかり、ブラジルのリオへ渡りました。その方の子供の家庭教師兼お姉さん代わりをしながら、語学学校と国立ブラジル大学の聴講生として学びました。今思うと、よく両親は出してくれたと思いますが、長兄が背中を押してくれたんですね。

2年目に、小林素三郎先生と奥様がりオで開かれた国際教育者会議においてになった時、短期大学に国文科ができるのと同じでした。その言葉が私には「帰っておいで」と聞こえて帰国、

1回生として入学したので、高校ではJRC(青少年赤十字)に入っていたのですが、その2年後輩が短大では同級生になりました。彼女は最初は敬語なんです。それでは困ると言うので、すぐに呼び捨てになりました。私はブラジルではニカと言われていましたので、短大のお友達には今もそう呼ばれています。

入学してすぐ、村井順先生から国文学会を作るようにと言われ発足させました。これは先生主導です。一方、手をさしのべてくださった素三郎先生の期待に応えるにはどうしたらいいかと考え、文芸同好会と歌舞伎同好会を作りしました。歌舞伎同好会は御園座の方と親しくなつて、天井桟敷などで見せていただいたりしました。

文芸同好会は「花環」という文芸誌を作つて素三郎先生にお見せしたら、「頑張ってるね」とお祝いを包んでくださいました。とても嬉しかったですね。在学中に3号まで出しましたが、私は詩や童話を書いていました。

短期大学に入って、いかに短大は勉強するところかと思いましたが、4年間でするところを2年間で勉強するわけですから。教職課程も取つて、中学の国語の教員免許をいただきました。父が大学で万葉集などを教えたり、中部短歌会の主幹で雑誌「短歌」を出しておりました。その関係で家には生まれた時から本が多く、卒論は自然と、以前から読んでいた歌人の中城ふみ子を取り上げることになりました。

私は父が48の時の子で、とても可愛がられました。学園祭の時、父の大切な短冊を借りて文芸同好会で展示したり、父に講師で来てもらつて歌会を作つていましたが、仲の良かった長兄が一昨年に亡くなつてからは、書けなくなっています。

私が短大時代に一番感動したのは、卒業前に高山へ合宿へ行った時、皆で輪になつて校歌を歌つたことです。2年間の短大生活の集大成のような気がして、こみあげてくるものがありましたね。未だにお友達が「あの時、あなた泣いたわよね」と言うんです。今も学園歌として歌い継がれているんですよ。

国文科は時折、東京で同期会をしています。そんな時は、名古屋から同級生が来るのですよ。ここ数年はちよつとお休みが続いていますけれど、でも短大以来の親友が近くに住んでいて、何かという電話をかけたたり、会いに行つたりしています。高校の時から親友は名古屋にいますが、彼女はブラジルに行つて2年間、毎週手紙をくれました。また、月に1度「あなたの代役よ」と言つて、私の代わりにお家へご飯を食べに行つてくれていました。あたたかくて思いやりがあつて、お友達には本当に恵まれていたと思います。(談)



愛知淑徳短期大学国文科第1回卒業生(昭和40年度卒業)
森久仁子さん(旧姓：春日井)

昭和19年生まれ。現在62歳。愛知淑徳高等学校3年から2年間、ブラジル遊学。帰国後、愛知淑徳短期大学国文科入学。昭和42年結婚、東京へ。45年より6年半、商社勤務の夫と共に赴任地ブラジルへ。滞伯生活は通算8年半。子供2人、孫4人。長兄は歌人の故春日井建氏。



現在の星が丘キャンパスの中・高管理棟近くの噴水池にて



卒業式に父と



淑徳高校文芸部の友人たちや姉との共著。「お母さんが書いた昔話」(ホームライフ社)。15年前に発行